

日中両言語における名詞の照応と 指示詞の省略に関する研究

——名詞の個性性と文脈の連続性に着目して

陳 熾如

◆要旨

照 応関係のある文脈の中で、照応詞を先行詞と同定するために、指示詞が使用される。定冠詞を持たない日本語は英語のような定冠詞を持つ言語と違って、指示詞の省略が許される。本稿は、定冠詞を持たない言語である日本語と中国語を対象として、両言語における名詞の照応と指示詞の省略、およびそれに影響を与える要因について考察した。調査の結果、名詞の個性性（人、生物、モノ）は、日本語の指示詞の省略に影響を与えているが、中国語に対する影響は観察されなかった。中国語においては、先行詞と照応詞の数量の一致が照応関係の成立に関わっている。さらに、両言語はともに、前後文脈の連続性に影響を受けていることが分かった。

◆キーワード

日中対照、照応関係、指示詞の省略、
名詞の個性性、文脈の連続性

◆ABSTRACT

This study discusses what factors affect the interpretation of nouns and the possibility of omitting demonstrative adjectives in Japanese and Chinese. Since there is no definite article in Japanese and Chinese, it is predicted that Chinese is similar to Japanese on using demonstrative adjectives. This paper focuses on whether bare nouns can be interpreted as antecedents depending on the individuation of objects and contextual relation. There are two results of the analysis. First, if it is an event predication, the individuation of objects affects the possibility of omitting demonstrative adjectives in Japanese. However, this is not found in Chinese. Second, in both Japanese and Chinese, although referents are objects, bare nouns can be interpreted as antecedents from contextual relation.

◆KEY WORDS

contrastive study of Japanese and Chinese,
Anaphora of the nouns, omitting demonstrative adjectives,
individuation of objects, contextual relation

The Anaphora of Nouns and the Omitting of Demonstrative Adjectives in Japanese and Chinese Focusing on the individuation of objects and contextual relation

CHEN YENJU

1 はじめに

文脈の中で、名詞が2度目以降に現れる場合、先行文脈の名詞（以下、先行詞）を再び指すために、後方文脈の同一名詞（以下、照応詞）に指示詞が付属する。この場合、指示詞の働きによって、前後の文脈が照応関係を持つ文となっている。しかし、日本語では、(1a)のように、照応詞が「その本」だけではなく、「〇本」の形式で、先行文脈の「本」を指すこともできる。それに対し、同じ場面である(1b)の英語は、「〇book」の形式が許容されない^[註1]。

- (1) a. フレッドが教室である面白い本の議論をしていた。私はその後、彼と{その/〇}本について議論をした。
b. Fred was discussing an interesting book in his class. I went to discuss {the /*〇} book with him afterwards. (庵2007)

これに関して、英語のような定冠詞を持つ言語では、照応詞を先行詞と同定するために、定冠詞や指示詞などの文法的マーカーが必要であるのに対し、日本語のような定冠詞を持たない言語では、潜在的にマーカーなしで照応詞を表すことができると述べられている(庵1994, 2007)。つまり、定冠詞を持たない言語は、裸の名詞で既出の指示対象を指すことができるということである。

定冠詞を持たない言語という類型論的特徴から見れば、中国語は日本語と同様、定冠詞を持たない言語に属している。このことから、中国語でも照応詞の前の指示詞が省略できると予想される。大河内(1997)、中川・李(1997)でも中国語の裸の名詞は定名詞として働くことができると述べている。

しかし、中国語では、(1)と同じ文脈において、指示詞が省略されると照応関係を確保できず、同じものを指すとは限らない。

- (1') Fred在教室裡討論了一本有趣的書。之後，我與他討論了{那本/#〇}書。
(筆者による(1)の中国語訳)

指示詞の限定用法に関しては、史(2012)が、日中両言語の対応に次の3パターンを挙げている。

- (2)【日本語のみ指示詞が省略できる場合】
a. 私は犬を飼っていた。{その/〇}犬は突然死んだ。
b. 我養過一隻狗，{那隻/*〇}狗突然死了。(史2012)
- (3)【日中両言語とも指示詞が省略できない場合】
a. 本屋で本を読んでいた。その後、{その/*〇}本を買った。
b. 在書店裡看了一本書。之後買下了{那本/*〇}書。(史2012)
- (4)【日中両言語とも指示詞が省略できる場合】
a. 昨日、先生から借りた本を読み終わった。{その/〇}本は難しく理解できないところがたくさんあった。
b. 從老師那兒借的書看完了。{那個/〇}書太難了，有很多不懂的地方。(史2012)

(4b)から、中国語でも指示詞の省略できる場合があることが窺える。しかし、(2b)と(3b)とは異なり、なぜ(4b)では指示詞が省略可能であるのかは不明である。加えて、日本語では、なぜ(3a)と(4a)のような違いが現れるのだろうか。本稿では、限定用法の指示詞の使用と省略について、日中両言語の異同を先行研究と照らし合わせ、説明を試みたい。

2 先行研究の指摘と残された課題

2.1 日中両言語の相違点について

庵(2007)では、定性が低い抽象名詞の場合、それだけでは定になりにくいため、先行詞を再び指すには指示詞の省略^[註2]が許されないと指摘されている。史(2008)でも、日本語では(2a)のような定性の高い普通名詞と比べると、定性の低い抽象名詞(5a)が指示対象である場合、指示詞が省略できないことが指摘されている。一方で、中国語は、普通名詞(2b)、抽象名詞(5b)とも

に定性が低い場合、照応詞の前の指示詞が省略できないとされている。

- (5) a. 私は今ある言語を習っている。{その／*〇} 言語は難しくて大変だ。
b. 我在學一門語言。{那門／*〇} 語言很難，學起來很辛苦。 (史2008)

この記述に照らし合わせると、(2a) と (3a) はともに普通名詞であるが、指示詞が省略できるか否かに違いがある。この違いはどこから来るのか。

この点に関して、岩田 (2006, 2013) は日本語の数量詞が代名詞の代わりに指示対象を指す機能を「数量詞の代名詞的機能」と呼んでいる。指示対象が個性性の高い人名詞の場合、数量詞 (eg. 二人, 三人) が代名詞として機能するが、個性性の低い名詞の場合、数量詞の前に指示詞が必要だと分析している (eg. その二冊, その三つ)。

岩田 (2006, 2013) を参考に、陳 (2014) では、照応詞が数量詞の場合だけでなく、裸の名詞の場合でも、名詞の個性性の影響が見られると述べた。一方、中国語では、同じ場面において、裸の名詞の前の指示詞が省略されにくい。

- (6) a. 山田教授の研究室を学生が訪れた。{その／〇} 学生は、副助詞の分類について教えてほしいと言った。
b. 山田教授的研究室有學生來訪。{那名／?〇} 學生詢問了教授關於副助詞的用法。 (陳2014)
(7) a. 昨日本屋で雑誌を買った。{その／?〇} 雑誌は机の上に置いてある。
b. 我昨天在書店裡買了雜誌。{那本／?〇} 雜誌放在桌子上。 (陳2014)

つまり、指示対象の名詞の個性性の高低は、日本語の指示詞の省略に影響を与えているが、中国語に対する影響が観察されなかったということである。日本語では、(2a) と (3a) の違いも、指示対象が「犬」と「本」という名詞の個性性の違いから解釈できるのではないかと本稿では考える。

中国語の場合、名詞が抽象的であるがゆえに、数量限定を必要とする (中川・李1997: 98) ことや、「一+X」が名詞について、個別の観念を与え、抽象的なものを具体化するために働いている (大河内1997: 63) ことなど、不定冠詞の「一

+X」が部分的に必須だと言われている。しかし、単数の「一+X」は先行詞を照応する機能を持たないため、数量情報の含まれる指示詞が省略できないとされている (陳2016)。言い換えると、中国語の (2b) と (3b) が不自然である理由は、中国語では先行詞が単数の場合、照応詞にも単数を表すマーカが必要になるためであると考えられる。

先行詞を裸の名詞に変えても、日本語では、照応詞の形式がほとんど変わらないが、中国語では、名詞複数形の形式で先行詞を指せるようになる。

- (8) a. 公園で一人の子供が遊んでいる。{その／〇} 子供は犬を追いかけている。
b. 公園裡有一個小孩子在玩耍。{那個／??〇} 小孩子在追著狗。 (陳2016)
(9) a. 公園で子供が遊んでいる。{その子供／子供／?その子供たち／?子供たち} は犬を追いかけている。
b. 公園裡有小孩子在玩耍。{那個小孩子／?小孩子／那些小孩子／孩子們^[註3]} 在追著狗。 (陳2016)

陳 (2016) の考察によると、中国語では照応詞が複数の場合、先行詞も複数の指示対象として解釈されるため、照応詞が先行詞と同定できるようになる。裸の名詞で先行詞を指せない理由は、先行詞・照応詞ともに単数と複数の可能性があり、数量が定まっていないためである。それが原因となって、照応詞は先行詞と常に同じ指示対象として解釈されないということが生じている。

以上のように、(3) において、指示詞の省略が許されないことには、日本語の場合は名詞の個性性が関連しており、一方で中国語の場合は、指示対象の数量が関わると考えられる。

2.2 問題点と残された課題

しかしながら、名詞の個性性が低く、名詞の複数形を持たないモノ名詞 (3) と全く同じ指示対象であっても、(4) の場合だと、日中両言語はともに指示詞が省略できる。

この事実について、ここでは前後文脈の關係に注目したい。(3)の第1文と第2文は「本を読んでいる」と「本を買う」であり、必ずしも意味的に連続しているとは限らない。「読んだ本を買う」より、むしろ「買った本を読む」の方が出来事の生起する順序としての必然性が高いと思われる。それに対し、(4)の「本を読み終わる」と「本を理解する」は、「読み終わった本を理解する」のように出来事の生起順序としての必然性が高く、意味的に関連性が高い。このような意味的関連性の違いが、指示詞の省略に影響を与えたのではないか。

また、陳(2016)では、照応詞の形式に違いがあるものの、日中両言語とも事象叙述(9)の許容度が高く、属性叙述^[註4](10)の許容度が低いことが示されている。

- (10)a. 公園で子どもが遊んでいる。{その子ども/??子ども/その子どもたち/??子どもたち}はかわいい。
 b. 公園裡有小孩子在玩耍。{那個小孩子/?小孩子/那些小孩子/?孩子們}很可愛。(陳2016)

この違いは、文の叙述の類型により、裸の名詞が個体読みされるか、総称読みされるかという違いがあるためだとされる。裸の名詞(eg.子ども)に事象叙述(eg.犬を追いかけている)がつくと、個体の名詞として解釈されやすく、先行詞の個体の指示対象と同じものとして解釈できるからである。一方、属性叙述(eg.かわいい)がつくと、個体の名詞としてよりも、総称的なものとして解釈されやすい。そのため、先行詞と同定するには、照応詞の前に指示詞が必要だと考えられる。

以上、先行研究から日中両言語における指示詞の省略に関わる要因を見てきた。日本語では、名詞の定性・個性性などの名詞の性質に関わる要因と叙述の類型のような文の性質に関わる要因が関与している。一方、中国語では指示対象の数量と文の叙述の類型が要因として関わると言えよう。

陳(2014)は名詞の個性性に着目したが、調査文が少なく、文の叙述の類型も統制されていない。そのため、得られた結果は個性性によるものか、文の叙述の類型によるものかが明らかになっていない。次いで、陳(2016)は叙述の

類型について論じたが、指示対象が個性性の高い人名詞のみであった。また、文脈の連続性の影響についても論じられていないという課題が残されている。

3 研究課題と調査概要

本稿は、以下の課題を設定し、分析を行う。

課題①：事象叙述の条件の下で、名詞の個性性(人・生物・モノ)の違いは日中両言語の指示詞の省略に影響を与えるのか。(陳2014の再検討)

課題②：日本語において、指示対象が個性性の低い名詞の場合、指示詞の省略が可能か。他方、中国語において、名詞複数形を持たない名詞の場合、指示詞の省略が可能か。日中両言語において、文脈の連続性はどのように影響を与えるのか。

先行研究に倣い、本稿では自然さの5段階評価アンケートを用いて検討した。調査に協力した日本語母語話者は大学・大学院に在籍している学生であり、課題①、②とも23名である。中国語母語話者は、日本語学校、及び大学(大学院を含む)の学生であり、課題①は24名、課題②は30名である^[註5]。

課題①では、人名詞、生物名詞、モノ名詞の事象叙述文を3問ずつ作成し、それぞれ「指示単数形(そのN/那+N)」、「指示複数形(それらN/那些+N)」、「裸の名詞(N)」、「名詞複数形(Nたち/N們)」に分け、計32問を作成した^[註6]。

課題②では、モノ名詞の事象叙述文(5問)と連続性が異なる文脈とを組み合わせ、照応詞を「そのN/那+N」、「N」に分けた(計20問)。

課題②については、「意味上の連続性」と「構文上の連続性」の両方を考慮し、文脈の連続性の高低を設定した^[註7]。どちらか片方以上が満たされない場合、連続性が低い文脈として考える。

【調査文の一例】日本語・課題①

調査文	不自然	どちらかという和不自然	どちらとも言えない	どちらかというと自然	自然
隣の部屋に男がいる。男はテレビを見ている。	1	2	3	4	5

【教示文】日本語

以下の調査文はそれぞれ2つの文で構成されます。「前の名詞」と「後ろの名詞」は同じものを指しているものとします。無理なく言えると思う文を「5：自然」、不自然だと思う文を「1：不自然」で判定してください。

教示文と調査文はすべて調査協力者の母語で提示した。なお、調査文の順序による影響を避けるために、ランダムで一文ずつ提示した。

調査協力者に教示文を読んでから、「1：不自然」「2：どちらかというとな不自然」「3：どちらとも言えない」「4：どちらかというとな自然」「5：自然」の5段階のうち、最も当てはまるものを選択するように指示した。

回答の中央値が4以上の場合、自然と判定する。中央値が3未満の場合を不自然な用法として「?」で表す。中央値が3～4の間の場合はやや不自然と判定し「？」と記す。

4 結果と分析

4.1 名詞の個性性との関わり

調査文を事象叙述文に限定する場合、「人名詞」「生物名詞」「モノ名詞」という名詞の個性性の違いにより、照応詞に対する日中両言語の母語話者の許容度の値は表1のようにまとめられる。網掛けの部分は中央値が4以上、即ち、本稿において自然だと考える項目である。

表1 日中両言語における名詞の個性性に於ける照応詞の形式の違い

	日本語				中国語			
	そのN	N	それらN	Nたち	那+N	N	那些+N	N們
人名詞	5	4.3	3.3	3	4.8	2.5	4.8	4
生物名詞	5	4	3.2	2.5	5	3	4.7	3
モノ名詞	5	3.3	3.3		5	2.3	4.7	

表1が示すように、日中両言語ともすべての調査文において、指示単数形が

自然だと判定されている。言い換えると、調査文は指示詞を用いることで、先行詞を指せる照応関係が存在する文脈であるということになる。

- (11) a. 隣の部屋に男がいる。{その男/男/?その男たち/?男たち} はテレビを見ている。
 b. 隔壁房間裡有男生。{那個男生/??男生/那些男生/男生們} 正在看電視。
- (12) a. 隣の家の猫が遊びに来た。{その猫/猫/?その猫たち/??猫たち} は私があげた小魚をおいしそうに食べた。
 b. 鄰居的貓到我家來玩。{那隻貓/?貓/那些貓/?貓兒們} 津津有味地吃完了我餵的小魚乾。
- (13) a. 昨日雑誌を買った。{その雑誌/?雑誌/?それらの雑誌} は田中さんに貸した。
 b. 昨天買了雜誌, {那本雜誌/??雜誌/那些雜誌} 借給了田中先生。

一方、日本語母語話者と中国語母語話者では選択傾向が異なっている。

日本語：指示単数形 > 裸の名詞 > 指示複数形 > 名詞複数形
 中国語：指示単数形 > 指示複数形 > 名詞複数形 > 裸の名詞

また、照応詞の裸の名詞に対する日本語母語話者と中国語母語話者の許容度は、以下の通りである。

日本語：人名詞 > 生物名詞 > モノ名詞
 中国語：人名詞 ≒ 生物名詞 ≒ モノ名詞

日本語では、「それらN」や「Nたち」の許容度が低かった。また、照応詞が裸の名詞の場合、人名詞の「男」、生物名詞の「猫」の許容度がモノ名詞の「雑誌」より高かった。言い換えると、照応詞は先行詞と同一指示対象として表すためには、指示詞の有無という要因よりも、照応詞が単数形か複数形かという

違いが日本語母語話者の選択に影響を与えていると言える。

照応詞が裸の名詞の場合、個性性が高い名詞の方が、個性性が低い名詞より許容度が高いことから、名詞の個性性の影響が観察されたと言えよう。これは先行研究を支持する結果である。

次に、中国語では、名詞の種類を問わず、「那+N（指示単数形）」が言える指示対象はすべて「那些+N（指示複数形）」の形式で言い換えられる。つまり、中国語では先行詞の裸の名詞が単数・複数とも解釈されうると言える。

また、名詞複数形の「男生們（男たち）」が言えるが、「猫兒們（猫たち）」になると、許容度が低くなる。一方、裸の名詞の指示詞の省略は「男生（男）」、「猫（猫）」、「雑誌（雑誌）」のように、名詞の個性性を問わず、すべて不自然かやや不自然という結果であった。

先行研究の指摘と照らし合わせると、以下のことが言える。

日中両言語とも、定性の高い普通名詞でも、属性叙述が付く場合、総称読みと解釈されやすいのに対し、事象叙述が付く場合、個体読みと解釈される（陳2016）。しかし、日本語では、文の叙述の種類が事象叙述の場合、指示対象が個体のものとして解釈されたとしても、名詞の個性性の違いにより、指示詞の省略の許容度が異なることが、課題①の調査で明らかになった。

中国語では、裸の名詞が先行詞を指せない点においては、陳（2014）の結果を支持している。中国語では、文の叙述の種類が事象叙述でも、先行詞と照応詞の数量解釈が一致しないと、両者が同一指示対象として解釈されにくい。その証拠として、裸の名詞の照応詞が同じ裸の名詞の先行詞と同定しにくいのに対し、名詞複数形の照応詞が、裸の名詞の先行詞を遡って指すことができることが挙げられる。

さらに、岩田（2006）は、日本語の場合、「一」以外の数量詞（特に「二」）が代名詞の代わりに既出した名詞を指せると述べている。課題①の調査からは、中国語の複数接辞の「-們」による名詞複数形も同じ機能があると言える。今後、数量詞による複数形も検討する必要があると思われる。

4.2 文脈の連続性との関わり

では、複数接辞を持たない中国語のモノ名詞においては、裸の名詞の形式で

既出の指示対象を指すことができないのだろうか。

課題②では、同じモノ名詞の前後文脈の關係に着目し、日本語母語話者23名、中国語母語話者30名を対象にアンケートを実施した。その結果は以下のようによまとめられる。

表2 文脈の連続性と照応詞の形式との関わり

文脈	日本語		中国語	
	その+N	N	那+N	N
連続性高	5	4	5	4.2
連続性低	5	3.4	5	3.6

表2から日本語の個性性の低い名詞や、中国語の複数接辞を持たないモノ名詞であっても、前後文脈の連続性が高い場合、指示詞の省略に対する許容度が上がることが分かった。

- (14)a. 私は本屋で雑誌を買った。面白かったので、{その/〇} 雑誌は帰りの電車で読み終わった。
b. 我在書店買了雜誌。因為很有趣，{那本/〇} 雜誌在電車裡就看完了。
- (15)a. 私は本屋で雑誌を買った。{その/??〇} 雑誌は昨日発売された。
b. 我在書店買了雜誌。{那本/??〇} 雜誌昨天開始販售。

(14) の場合は、「雑誌を買った/買った雑誌」と「雑誌を読み終わった/看完了雑誌」の主語は同じ人として解釈できる。つまり「S1が雑誌を買った」「S1が雑誌を読み終えた」は可能である。一方、(15) の「雑誌を買った/買った雑誌」と「雑誌が発売された/雑誌販售了」の主語は多くの場合、同じではない。つまり、「S1が雑誌を買った」「S2が雑誌を発売した」ということになる。

また、時系列から考えると、(14) は「雑誌を買って、読み終わった/買った雑誌、看完了」のように、日本語の「て形」で接続できる継起的文脈では、意味的にも、構文的にも連続性が高いと考えられる。一方で、(15) の「??雑誌を買って、発売された/??買った雑誌、販售了」は言えず、連続性が低いと思

われる。

課題②の結果から、連続性の高い文脈の場合、「読み終わった雑誌／看完的雑誌」が「買った雑誌／買的雑誌」として解釈できる。

一方、主語が変わったり、もしくは時系列に沿わなかったりした前後文脈においては、(15)の「発売された雑誌／販售的雑誌」は「買った雑誌／買的雑誌」として解釈されにくく、照応詞が先行詞と同定するには、指示詞が必要である。

まとめると、中国語では、照応詞が名詞複数形の場合、先行詞も複数として解釈されるため、指示詞がなくても照応詞が先行詞と同定できる。それに対し、複数接辞を持たないモノ名詞の場合、裸の名詞では数量が定まらないが、文脈の連続性の助けにより、照応詞が先行詞と同定できるようになる。

一方で、裸の名詞が単数として解釈されやすい日本語では、指示対象が個性性の高い名詞の場合、指示詞の省略に対する許容度も高い。しかし、個性性が低いモノ名詞でも、文脈の助けによって、個性性を高めることができる。それによって、指示詞のような文法的マーカーがなくても、照応詞が先行詞と同定できる。

これは、英語の可算名詞 (eg (1) の book) は裸の名詞で文の中に現れない一方、日本語と中国語では、文脈により裸の名詞が単数、複数、総称、個体すべて表すことが可能なためである。名詞の照応関係に関して、異なる傾向が示されているのは、日本語母語話者と中国語母語話者の間で、裸の名詞に対する数量の解釈が異なることに起因すると考えられる。

5 終わりに

本稿は指示詞の使用と省略に関して、定冠詞を持たない点で、類型論的には同類型である日本語と中国語の異同を検討した。主に照応詞が如何にして定として解釈され、先行詞と同定できるかについて、指示対象の名詞の個性性と前後文脈の連続性による影響を分析した。

その結果、日中両言語は、指示対象の裸の名詞に対する解釈が異なるため、指示詞の省略に対する許容度も異なることが分かった。課題①と②の結論は次のようにまとめられる。

課題①：日本語では、裸の名詞が単数として解釈されやすいため、指示対象の個性性が高く、個体読みと解釈される場合に、指示詞の省略に対する許容度も高い。中国語では、裸の名詞が単数とも複数とも解釈されるため、照応詞が個体読みをされても、数量が定まらなければ先行詞と同一指示対象として解釈されにくい。そのため、照応詞が名詞の複数形の場合に許容度が高く、裸の名詞の場合は許容度が低い。

課題②：日本語では、個性性の低い名詞において、中国語では、複数接辞を持たない名詞においても、前後文脈の連続性が高ければ指示詞の省略に対する許容度が上がる。これは、前後文脈の助けにより照応詞が先行詞と同じ指示対象として解釈されるためである。

表3 日本語と中国語における指示詞の省略の許容度

名詞の定性	叙述の類型	名詞の個性性	照応詞		
			日本語	中国語	
普通名詞	事象叙述	人名詞	N: 自然	N: 不自然	
			Nたち: 不自然	N們: 自然	
		生物名詞	N: 自然	N: 不自然	
			Nたち: 不自然	N們: 不自然	
		モノ名詞	連続性高	N: 自然	N: 自然
			連続性低	N: 不自然	N: 不自然

一方、本稿は名詞の個性性と叙述の類型、および文脈の連続性を統制するため、作例を用いて調査したが、得られた結果は母語話者の容認度であり、日常生活の中、実際に使用された発話の実態はまだ明らかになっていない。今後実例による検証が必要である。

また、中国語と日本語における母語話者の許容度の違いが、言語学習にどの程度影響を与えるのかについても課題の一つとして取り上げたい。

〈台湾 静宜大学〉

謝辞

本稿は、平成27年度に広島大学大学院教育学研究科に提出した学位論文「指示詞の使用と省略可能性に関する日中対照研究」の一部に加え、2015年度日本語学会秋季大会（於山口大学）、および、2017年度日本語／日本語教育研究会 第9回大会（於大阪大学）での発表内容に加筆・修正を行ったものです。博士論文の執筆にあたり、ご指導くださった主査の白川博之先生、副査の畑佐由紀子先生、酒井弘先生に、貴重なご助言を賜りました。査読者の先生方、学会会場でご意見をくださった皆様に、厚く御礼申し上げます。また、調査に関わる協力者の皆様には心から感謝申し上げます。

史雋（2012）『日中指示詞の対照研究』平成23年度博士論文（一橋大学），pp.1-126. 一橋大学機関リポジトリ <http://hdl.handle.net/10086/22864>

陳熾如（2014）「日中両言語における指示詞の省略可能性—名詞の種類を焦点に」『政大日本研究』11, pp.187-208. 政治大学日本語学科

陳熾如（2016）「日中両言語における人名詞の解釈に関する研究—指示詞の省略可能性の観点から」『広島大学日本語教育研究』26, pp.9-15. 広島大学教育学研究科

中川正之・李凌哲（1997）「日中両国語における数量表現」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集』pp.95-116. くろしお出版

益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版

益岡隆志（編）（2008）『叙述類型論』くろしお出版

注

- [注1] …… 「*」は非文法的であることを示し、「#」は文法的ではあるが、照応関係を持たないことを表す。「?」はやや不自然、「??」は不自然を表す。なお、引用された文の判定は、それぞれの出典に従う。
- [注2] …… 庵（2007）は、省略を「この」「その」と並列する現象と考えているため、「ゼロ指示」と呼んでいる。
- [注3] …… 中国語の「-們」は、日本語の「-たち」と同様、原則的に人称代名詞および人名詞につく複数接尾辞である。
- [注4] …… 益岡（1987, 2008）は、文の叙述の類型を時間軸のどこかで発生する動的出来事を表す「事象叙述」と時間的制約を受けない「属性叙述」に大きく分けて説明している。
- [注5] …… 調査協力者および調査期間が一部共通しているが、すべて同じではない。
- [注6] …… 複数形の形式自体が不自然である例（モノ名詞、一部の生物名詞）を調査文から外した。
- [注7] …… 「本を読む」と「本を理解する」は意味的に連続している。また、「本を読んで、理解した」と言えるため、構文上においても、連続性が高いと考える。

参考文献

- 庵功雄（1994）「定性に関する一考察—定情報という概念について」『現代日本語研究』1, pp.40-56. 大阪大学文学部
- 庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 岩田一成（2006）「日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語」『日本語文法』6(1), pp.38-55. くろしお出版
- 岩田一成（2013）『日本語数量詞の諸相—数量詞は数を表すコトバカ』くろしお出版
- 大河内康則（1997）『中国語の諸相』白帝社
- 史雋（2008）「文脈における日中指示詞の対照研究」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp.65-77. 一橋大学

